
精神疾患にかかる方が異常！？

2023年11月22日 05:10

17

研究の背景：日本の精神疾患の生涯罹患率は20%

2016年発行の世界精神保健調査（World Mental Health Survey ; WMHS）において、日本の精神疾患の生涯有病率が20.3%と報告されていることから（*Epidemiol Psychiatr Sci* **2016**; 25: 217-229）、「5人に1には生涯に一度は精神疾患に罹患する」などといわれることが多い。

英国では循環器疾患、がん、精神疾患が三大疾患とされているが、日本では厚生労働省ががん、脳卒中、急性心筋梗塞、糖尿病、精神疾患を「5疾病」としている。

いずれにせよ、5人に1人が精神疾患に罹患する、と聞くと多くの人が驚くであろう。

しかし最近、こうした考えをさらに進めた研究が報告された。次々と興味深い疫学研究を報告している、デンマークのLars Vedel Kessing氏らによる、*JAMA Psychiatry*誌に掲載された論文である（*JAMA Psychiatry* **2023; 80: 1000-1008**）。

研究のポイント1：デンマークの一般人口150万人を解析

本研究では、1995～2018年におけるデンマークの一般人口からランダム化抽出した150万人のレジストリデータが解析された。

一般人口における治療歴のある精神疾患の生涯有病率を、出生から100歳まで推定した。精神疾患は、①入院あるいは外来受診した病院で精神疾患の診断を受けた、②処方統計で病院、開業医、精神科医から精神薬の処方を受けたことと定義した。

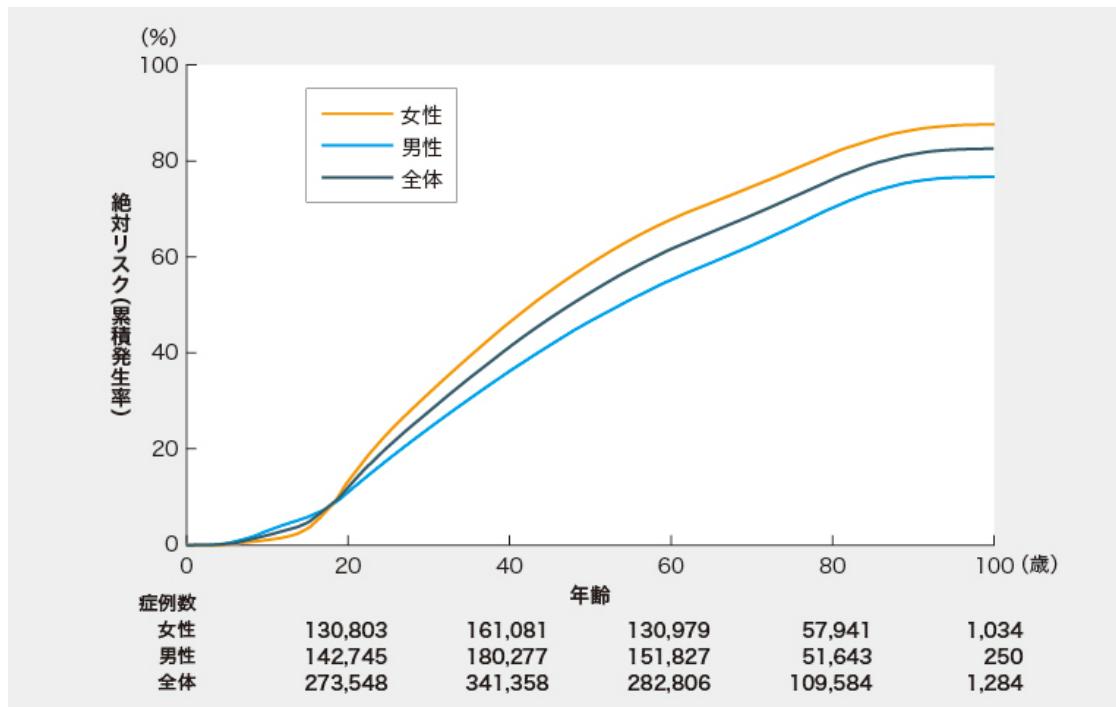
学歴、雇用状態、所得、居住形態、および配偶者の有無などの社会経済状態も調べた。

研究のポイント2：「精神疾患の診断＋向精神薬の処方」の100歳までの発生率80%超

解析の結果、46万2,864人がなんらかの精神疾患を有しており、年齢中央値は36.6歳であった。このうち、病院を受診して精神障害の診断が登録されたのは11万2,641人、向精神薬の処方が登録されたのは42万2,080人であった。100歳までに病院で精神疾患と診断される絶対リスク（累積発生率）は、29.0%（女性31.8%、男性26.1%）と推算された。

向精神薬処方も考慮すると、なんらかの精神疾患／向精神薬処方の100歳までの累積発生率は82.6%（女性87.5%、男性76.7%）に上った（図）。

図. 「精神疾患の診断＋向精神薬の処方」の生涯発生率



(JAMA Psychiatry 2023; 80: 1000-1008)

社会経済上の困難要因のうち、低所得（ハザード比1.55）、失業または障害給付の増額（同2.50）、一人暮らし（同1.78）および未婚（同2.02）が精神疾患／向精神薬処方と関連していた。

結論として、デンマーク人口の大規模な代表サンプルのデータを用いたこのレジストリ研究では、個人の大多数が生涯の間に精神疾患の診断を受けるか向精神薬を処方され、それがその後の社会経済的困難と関連していることが示された。

私の考察：精神疾患は誰でもかかるもの

100歳まで生きた人の82.6%が精神疾患と診断されるか、向精神薬を処方されるという本研究の結果は、精神疾患にかかる方がある意味「異常」といってもよいくらいである。この結果は一見衝撃的ではあるが、よくよく考えると、100歳まで生きるとほとんどの人が認知症を発症することは以前からいわれており、既知の事実といえなくもない。しかし、デンマークの一般人口を対象とした大規模レジストリデータの解析によって、これがあらためて示されたことは重い事実というべきであろう。

この論文を読んで、「精神疾患は誰でもかかるもの」と自信を持って言えそうだ。

※ 加藤忠史氏のDoctor's Eyeは毎月22日に掲載します。次回の掲載は12月22日の予定です。

加藤 忠史 (かとう ただふみ)

順天堂大学精神医学講座主任教授。1988年東京大学医学部卒業、同病院で臨床研修、1989年滋賀医大精神医科大学講座助手、1994年同大学で医学博士取得、1995年米・アイオワ大学精神科に留学（10ヶ月間）。帰国後、1997年東京大学精神神経科助手、1999年同講師、2001年理化学研究所脳科学総合研究センター精神疾患動態研究チームリーダー、2019年理化学研究所脳神経科学研究センター副センター長を経て、2020年4月から現職。



関連タグ

#精神・神経科 #心療内科 #精神疾患